

## 保渡田の古墳群

新井 宏

群馬県倉賀野の小さな信仰寺、日蓮宗妙法寺。縁あって妻がその早朝勤行に参加したいと言う。しかし往年の中仙道宿場町、倉賀野宿には旅館もビジネスホテルもないらしい。「高崎ならたくさんホテルがあるよ」と言っただけはみたものの、女ひとりで泊まるのは心細いという。結局、「勤行には付き合わないよ」との条件で、前夜から同行することにした。早春の一日、前方後円墳の里、群馬を散策するのも悪くはあるまい。

その古墳散策が、またもや我が古韓尺研究に大僥倖をもたらすことになる。それはどう考えても、もう地道な努力の成果などというレベルではない。つき過ぎだ。つき過ぎていく。ニッチな「ものさし」の研究をはるかに越えて、古代史の壮大な学説として飛躍する大成果だ。心が高揚して躁の状態が止まらない。

そういえば、既に同じようなことを、もう二度も『まんじ』に書いている。その都度、躁の状態で、僥倖に感謝し、わが研究成果を謳いあげている。

最初の時は「……大満足だ……大満足だ……妻に感謝する……」と叫んだ。二度目には「……ついでに……ついでに……本当についている」と叫んでいる。それは三度目を書くことなど夢想だにしていなかった証拠でもある。それなのに、三度目の成果は、今までをはるかに越えて、東アジアの古代史に想像もしていなかったような新事実を提供するものだ。この心の高揚をどう表現したら良いのだろうか……。しかし古韓尺と共に歩んだ我が心の旅路は、もうみんな書いてしまった。それでも書く。書きたい。

一昨年の時はこうだった。韓国の古都慶州を散策中に突然着想を得た。近年の発掘調査結果と『三国史記』や

『三国遺事』の記載を対比すれば慶州にあった新羅王京の完全復元が可能なのではないか。それは我が古韓尺学説を文献学的に実証することになるのではないかと。

ところがそれは全くの誤解に過ぎなかった。そして深い挫折の後に、再びもつともつと広い世界があることに気づき「新羅王京論文韓國語」として『百濟研究』に発表した。それは状況証拠のみによって成立していた私の古韓尺学説に、基本文献による裏づけを与えた瞬間であった。その時、私はもうこれで十分いや十分過ぎるとさえ思った。そしてその心の弾みを「誤解から始まる」に書いた。それは三十年にも及ぶアマチュア研究歴をサラリーマンの喜怒哀楽と共に描くことでもあった。

ところが昨年の初めになって、再び同じようなことが起った。釜山の景勝地、海雲台冬栢島を散策中に、新羅末期の大学者崔致遠の銅像に再会したのがきっかけで、彼の崇福寺碑文に「一結九千歩」を意味する重大な記事を発見する。それは朝鮮半島の土地制度の疑問を全て解く鍵であった。いままで実態の良く分っていない朝鮮半島の土地制度「結負制」について、一気に解明し「結負制論文(韓國語)」として『韓國古代史研究』に発表する。それは方三十三歩(すなわち千八十九歩)を一結とする不自然な制度の起源を明快にしたばかりでなく、結負制が古韓尺を基にしていたことを明瞭に示していた。し

かも結負制の面積の名称も実面積も日本古代の代制と全く同一ではないか。それはもう尺度史という世界に留まらず、日本と朝鮮半島の古代史全般に大きな影響を与えることであった。そしてその気持ちの高揚を「崔致遠の碑文」に書いた。その時も、もうこれで十分という気持ちであった。

そして三度目である。もうこれ以上望むべくもない形で、我が古韓尺研究は壮大な学説として結実する。それは朝鮮半島の結負制で用いられていた計測システムが大化前代の代制で用いられていたばかりでなく、前方後円墳の築造企画にも用いられていた事実を、膨大な古墳の計測資料が明示したことである。

機が熟していた。何よりも群馬県の大形前方後円墳群の発掘調査結果が我が研究を後押ししてくれた。そこに盛られた研究成果は、まさに結負制の計量システムそのものを意味しているではないか……。それをきっかけに、全国の発掘調査を経た大形前方後円墳を調べて見れば、みな同じ基準で理解できるではないか……。

しかもそのことは、天皇陵等の超大型前方後円墳の築造企画にも共通している。どの天皇陵も、どの天皇陵も結負制の単位に見事に合致しているではないか。そして、わずか一ヶ月間で三十ページほどの「前方後円墳論文」を纏め上げ、急いで日本考古学会に送った。こんどは日

本語の論文だ。これで安心して飛行機に乗れる。

これまでの研究で明らかになったことは、まとめてしまえば簡単である。四世紀から八世紀の日本と朝鮮半島で、古韓尺システムすなわち尺二十六・七センチ、歩六尺：一・六〇米、量田歩(三歩)：四・八〇米、里(三百歩)：百量田歩(四百八十米)の計量制度が行われていたこと、それにつぎ。

しかしそれは、まったく何も無いところから生じた研究である。先行研究もなければ、後続の研究もない。もちろん文献史料にも記載がない。まったく無から生み出されたものなのだ。したがって常に不安定な学説としての地位に甘んじていなければならなかった。

十数年前、吉川弘文館から『まぼろしの古代尺』を出版した時は、数多くの寺院、宮殿、古墳等を解析した結果とは言え、いわば帰納的に古韓尺の存在を見出したに過ぎなかった。なるほど良く合うには合うけれど、何の証拠もないではないか。それが専門家たちのクールな意見であったように思う。まだ片足立ちの不安定な状況であった。

だから「新羅王京論文」によって、考古学的な成果と『三国史記』などを対比して、古韓尺を文献によって検証できた時、やっと二本の足で立てた充実感があった。しかし残念ながら『三国史記』は、原記録があったかも知

れないが十二世紀の文献である。有力な証拠ではあるが、ひとつの推論に過ぎないと見なされるかも知れない。まだ不十分である。

そして「結負制論文」で初めて、古韓尺の研究から離れて、文献史料を中心として、朝鮮半島の結負制の復元を行い、その基本単位の東が量田歩(三歩)の正方形で定義されていることを見出した。そしてその歩が結果的に古韓歩と一致している上に、その面積単位の東が日本の代制の東代と面積的に完全に一致していることも突き止めた。いわば全く独立の研究結果が古韓尺学説を三本目の足として支えることになった。もうこれで十分だ。

新史料発見が期待薄である古代史の分野においては、個々の推論に多少の危うさが付きまとうのは止むを得ない。しかしそのような危うさを伴う新学説であっても、相互の研究結果が三本足のように支えあうようになると、にわかに強固な学説になる。それぞれの研究が内包している危うさが消えて、大地に足をおろせるようになる。それが「結負制論文」の役割であった。

その上に、更に今度の「前方後円墳論文」である。もちろんある意味では、この研究も結負制、代制に関する学説を強力に支えるもののひとつに過ぎないかも知れない。しかし、百家争鳴の感のあった古墳の尺度問題に整合性のある答えを与えたことだけでも、ひとつのエポッ

クである。

従来、古墳尺度研究は、計量史の大家小泉袈裟勝氏が嘆くように「都合の良い数字だけを選んで自説を立てる人が跡をたたない」状況で、中国の計量史も参照せず、ましてや朝鮮半島の制度とは無関係に進められてきていた。それに対して数値的な適合度はもとより、歴史的な背景を踏まえての決定的な提案となるのが今度の論文である。しかも古韓尺説とも完全に整合する。したがって四本足目の結論は、東アジアの古代史に重大な影響を与えることになるであろう。古代史分野で、これほどの事実が明らかになるのは、いわば奇跡的なことなのだ。

そもそも私が「ものさし」の研究というニッチな世界に目を向けるようになったきっかけは古墳の尺度問題である。それは昭和五十年に森浩一氏の『古墳の発掘』を読んだ時であった。氏によれば大型前方後円墳の多くが晋尺(二十四センチ)の百尺(二十四米)を基準単位としているという。まことに美的な推論には圧倒される思いがあったが、良く見ると矛盾も多い。そして尺度問題にのめりこんで行った。

だから古墳の尺度問題は私の研究の原点である。しかし私は、今まで数多くの論文を発表しながら、古墳問題を取り上げたことはなかった。それは小泉氏の言うような議論に陥るのを厳しく自戒していたからである。それ

なのはどうして、「前方後円墳論文」を書くに至ったのか。ここでやっと、倉賀野に戻る。

高崎駅前のホテルを五時に出る頃は、まだうすら寒かった。上着を羽織ってくれば良かったかな思いながら、タクシートの運転手に大鶴巻古墳の近くまでと言うがどうも要領を得ない。古墳の名前はもう地名としては通用しないのかも知れない。その大鶴巻古墳の南三百米くらいのところに妙法寺はある。

妙法寺は普通の葬式寺とは異なり、今どき珍しい信仰寺である。十年ほど前に、信者たちが集うのに不便だというので、金井賢秀・妙淳先生ご夫妻が築き上げたお寺である。最近、信仰一筋の人生をおくる義母が何かと寺を支えているようで、その関係で妻も時折通っている。

私のように、信仰へのあこがれを持ちながらも、小理屈がそれを阻んでいて、まだ遠くをうろろしている者にとっては、微妙な場所である。しかし、このところ順調すぎる我が研究が、何かのお陰であることは確かなことなのだ。妻はかねてから私が「お坊さん」に向いているという。そんな気もする。

しかし今日は引き留められてしまいうわけには行かない。妻を送り届ける早々に、これから古墳を見てまわるのと言って辞する。そしていつものように地図も持たず歩きはじめる。目指すは大鶴巻古墳と浅間山古墳、いずれ

も倉賀野の代表的な古墳で、墳丘長が百二十三米と百七十二米となっている。しかも周堀を備えた堂々たる古墳で、浅間山古墳は全国でも六十位くらいにはランクされる大きさである。

日曜日の早朝のこと、誰の許可も得ずに私有地の古墳に立入れる。しかしまさかスコップを片手にと言うわけにも行かない。写真は随分とつたが、それで何か判るほどではない。現地で見ると古墳はなんと書いてもその立地条件が中心であって、資料がないと墳丘長ひとつ判らない。

そういえば、高崎の図書館にはまだ行ったことがない。大鶴巻古墳や浅間山古墳の資料漁りに行ってみるのも良いかも知れない。何よりも、日曜日の日課、三方歩を消化するにはもってこいの距離だ。ああ、そうだ。保渡田古墳群の発掘調査資料もぜひコピーしたい。

しかし二時間ほどで辿りついた市立の図書館はたまたま蔵書整理中で休館日であった。せっかくの思いつきが一頓挫してしまったことに不満が残るが、明日にでも国会図書館で調べればよいではないか。

ところで、日本にはどのくらい古墳があるのだろうか。通常言われているのは三十万個であり、その内、前方後円墳は六千個である。それでは前方後円墳が一番多くあ

るのは何県であろうか。この質問に大多数の方が奈良県または大阪府と答えるに違いない。

確かにその通りであり、墳丘長百米以上を対象とすれば、全国に約三百個あるうちの半数近くが奈良と大阪にある。次に多いのが実は群馬県なのた。しかし、中小規模の前方後円墳を含めると事情が様変わりする。一位千葉県、二位茨城県、三位群馬県と関東勢が上位を占め、以下岡山県、鳥取県、栃木県、広島県と続き、その後にはつと奈良県が出て来る。したがって群馬県は大小バランス良く前方後円墳が存在している点では、奈良県よりもむしろ典型的な古墳地帯なのである。そのひとつの代表例が保渡田古墳群である。

保渡田は妻が疎開していたところ。かつて私が古墳の調査に夢中になっていた頃、妻が良く言っていた。保渡田にもそんな古墳なら沢山あると。しかしそのころ古墳尺度の研究と言えば、均整のとれたいわゆる天皇陵が中心で、地方の古墳などその外形さえきちんと記録されているものも少なく、あまり関心をもたなかった。

しかしもう十年くらい前になろうか、早春の日曜日、思い立って妻と保渡田に向かう。保渡田は群馬県群馬郡群馬町という珍しい地名のところにあるが、そこには、信越新幹線の工事で見つかった三ツ寺遺跡という豪族の館跡がある。専門家にとっては有名な遺跡であるが、地

元では誰も知らない様子。新幹線沿いに歩いて行けば簡単に見つかるとの目論見は見事にはずれ、気がつくところこはもう保渡田であった。そこで全く偶然に妻の知人「新宅のおばさん」に出会う。「新宅」は古墳群に隣接して、古墳群の地主のひとりでもある。

保渡田古墳群は、二子山古墳(丘長百十一米)、八幡塚古墳(九十六米)、薬師塚古墳(百五米)で構成されている。いずれも五世紀の古墳で、三ツ寺の豪族たちの墓といわれている。平面図を見れば、周堀を巡らせた大規模の古墳であるが、その時の印象ではローカルな古墳群にすぎなかった。ただ「新宅のおばさん」が薬師塚古墳内に居を構える西光寺に案内してくれて、古墳出土の馬具類を拝見することができたのが大収穫であった。古墳出土の馬具としては日本でも有数のものだった。

この西光寺には後日談がある。わが知人、田村家範氏が、西光寺にある古墳出土の金属佛をぜひ一緒に見て欲しいというのだ。私は金属考古学分野では多少知られていて、このような依頼を受けることがよくある。歴史や考古学の専門家たちは古墳から仏像が出るわけがないと一蹴しているが、群馬県下には類似の仏像がかなりあるという。そう言えば朝鮮半島にも似た小銅佛がある。いずれ金属分析などを利用して、解明したいテーマであるがいまは先を急ごう。

その西光寺を江戸末期の学者松崎謙堂が訪れていることをたまたま「鎌堂日暦」で読んでいた。松崎謙堂は蛮社の獄の時、渡辺華山を断固として庇った人物、我が敬愛する狩谷斎翁の親友である。由緒ある西光寺の住職も案の定そのことを知らなかったが、寺の歴史の一ページを飾れると喜んでくれた。

その頃ちょうど、八幡塚古墳の発掘調査が終わり、その一帯は「上毛野はにわの里公園」として整備され、「かみつけの里博物館」もオープンしていた。妻が気安く「新宅のマーちゃん」と呼ぶ「おばさん」のご子息も公園整備や博物館開館に大きな役割を果たしたらしい。

このように何かと縁のある保渡田古墳群が今回の機軸を与えてくれた主役である。国会図書館でコピーした八幡塚古墳整備報告書を見ると、そこには均衡のとれた美しい復元平面図とともに、主要な計測値の全てが、結核の基本単位すなわち古韓歩と量田歩で設計されたことが明示されているではないか。

もちろん報告書に古韓歩とか量田歩などという言葉が出てはいるわけではないが、報告者の若狭徹氏によれば、主な築造企画は二十四米単位、細部は一・六〇米の単位によっているというものだ。言い換えれば、基本企画は量田歩の五歩、細部は古韓歩によって企画されたということである。それが発掘調査によって得られた精緻な計

測値を基に、古韓尺を知らない研究者によって割り出されていることに大きな意義がある。

それからは芋づるであった。良く調べてみれば、群馬県の古墳研究第一人者の梅澤重昭氏も、綿貫観音山古墳発掘調査報告書で「使用された基準尺度モジュールは、墳丘や周堀各部の計測値に包含されているものと考えられ、その公約数値から帰納すれば、晋尺二十尺 $\parallel$ 四・八〇米であろうと推定している……この基準尺度は、一尋 $\parallel$ 一・六〇米とした場合の三尋 $\parallel$ 四・八〇米とする可能性もある……」と指摘している。

そうなのである。調べてみれば群馬県で発掘調査された全ての大型前方後円墳の企画が、古韓歩と量田歩によって、見事に再現されるのである。

そればかりではない。南関東最大の千葉県内裏塚古墳も、東北地方最大の宮城県名取雷神山古墳も見事に一致している。兵庫県で発掘調査された五色塚古墳もしかりだ。

そうなると欲が出る。未発掘ではあっても墳丘長二百米を越えるような天皇陵等なら、多少の誤差があつても、議論に耐えうるただろう。そう考えて、データを整理して見てまたまた驚く。実にきれいに整理できるのだ。

例えば、墳丘長だけを対象として量田歩で示すと、日本最大の古墳、仁徳陵は百歩すなわち一里(四百八十米、

二番目の応神陵は九十歩、三番目と四番目の履中陵、岡山造山古墳は七十五歩、五番目の河内大塚古墳は七十歩、そして七番目、八番目、九番目、十番目の景行陵、土師ニサンザイ古墳、岡山作山古墳、仲津媛陵はいずれも六十歩で復元でき、その誤差はすべてほぼ一パーセント以内に納まっているのである。ある意味では発掘され古墳以上に良く合致している。

どうしてこんな簡単なことにいままで誰も気がつかなかったのだろうか。いや、もちろん気づいていた人は多くいる。森浩一氏をはじめ多くの研究者がこれらを晋尺の百尺単位(二十四米)で設計されたとしていたのである。晋尺百尺は量田歩の五歩の長さに等しい。

ところが、晋尺を基準にすると非常に良く合うデータが多くある反面、全く合わないデータも数多くあり、そこには極端な差異があるのだ。それは古墳の築造企画には量田歩を基本として使用しながらも、古韓歩の百歩(六十米)、八十歩(百四十四米)なども用いられていたからである。これらはどうしても晋尺のきれいな整数倍では示せない。しかし結負制の基本単位なら、この問題を簡単にクリアしてしまうのである。

その上、晋尺説にはもっと大きな問題点があった。それは、古墳のような大型工事に果たして尺の単位を使用

したかの問題である。周知のように古代中国では土地を測るのは歩が原則である。もちろんその歩は六尺のことで尺と無関係ではないが、晋尺で二千尺とか千尺と述べるためには、尺が土地の計測に直接使われた事例を中国に求めなければならぬ。しかし中国では土地制度の基準単位はあくまで歩であり、これは墓地の大きさを示す時も例外ではない。例えば、中国河北省から出土した中山王墓の銅板設計図にも墓域を示すには歩単位を用いており、『後漢書』『魏書』にみられる皇帝陵もみな歩で示されている。

更に言えば、晋尺を二十四センチとする議論そのものにも問題がある。中国では晋代の「ものさし」が六本見つかっているが、その半数は二十四・五センチであり、決して二十四センチではないのである。だから古墳設計に晋尺を用いたとする議論には致命的な欠陥がある。

ちょっと力み過ぎたかも知れない。しかし、私の古韓尺研究の原点はもともと古墳尺度研究にあった。それは簡単に解けそうदैて手強かった。しいて答えを求めると、雨後の筍のような研究者たちの論理に墮してしまっておそれがあった。それはとても我が矜持が許さなかつた。そして実証的な研究を目指す過程で、統計学理論を応用し、古韓尺を帰納的に発見したのだった。

しかし古墳尺度研究にはやはり未練があり、相次いで

発表される新説には目を通していた。けれどもそれらも多くは、むしろ当初の提案よりも恣意的で議論の水準も見劣しており、内心苦々しく思っていたが、いままら古墳尺度の論争に参加することもあるまいと傍観していた。そこに今回の発見である。

思えば遠回りをしたものだ。しかしその遠回りが古韓尺を発見させ、朝鮮半島の土地制度「結負制」を解明させ、そして代制と結負制が同じシステムであったことを突き止めてくれた。その結果が今度の古墳尺度の解明につながっている。

さあ、これからこの新発見を歴史学者たちがどう扱ってくれるか、期待がふくらむ。

かくして我が尺度研究の旅は原点に回帰する。思えば不思議な邂逅であった。それは全て神仏に導かれたものであったのかも知れない。

新羅王京論文「三国史記遺事記事による新羅王京復元と古韓尺」『百濟研究』三十六号。結負制論文「結負制の復元と代制の起源」『韓国古代史研究』三十号。前方後円墳論文「古墳築造企画と代制結負制の基準尺度」『考古学雑誌』投稿中